

新型インフルエンザの予防行動と発病リスクの関係について ～ A小学校5年生の実態から見た検討～

岩田 将英
(公立小学校教諭)

〔目的〕

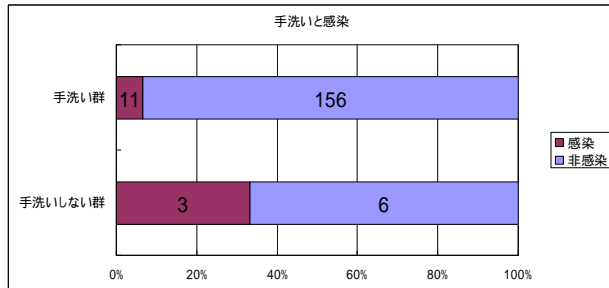
現在、新型インフルエンザが蔓延しており、学校現場においてはいかに予防するかが喫緊の課題である。したがって、効果の高い予防行動を検証し、実施していくことは児童・生徒に有益であると考えた。WHO等が報告している効果的な予防処置は「手洗い」であり、「うがい」や「マスク」は、その効果が実証されていない。しかし、自分自身の経験や、児童・生徒の日常的な観察から、「うがい」や「マスク」の効果を強く感じる。そこで、自らが担任している学年の全児童をサンプルとして、調査を行うこととした。

〔方法〕

時期：2009年10月下旬。対象：A県B市C小学校5年生 188名(有効回答数176名、有効回答率93.7%)。「健康のアンケート」と題する質問紙を無記名で回答するよう求めた。その結果をSPSS 12.0J for Windowsにて集計し、予防行動の有無別にリスク比等を求めた。

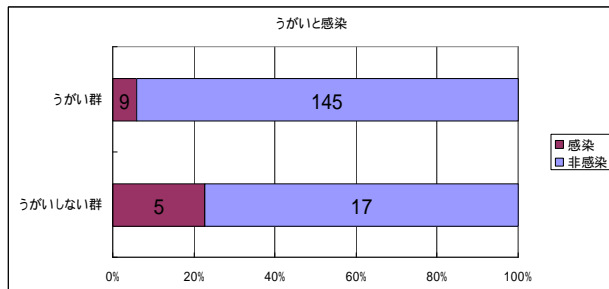
〔結果〕

1.手洗いについて(棒グラフの数字は人数、以下同じ)



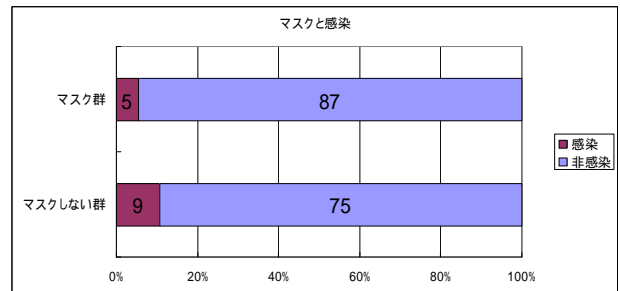
手洗いをする児童の感染率は6.6%なのに対し、手洗いをしない児童は33.3%の感染率を示した。リスク比は約5.1倍であった。

2.うがいについて



うがいをする児童の感染率は5.8%なのに対し、うがいをしない児童は22.7%の感染率を示した。リスク比は約3.9倍であった。

3.マスクについて



マスクをする児童の感染率は5.4%なのに対し、マスクをしない児童は10.7%の感染率を示した。リスク比は約2.0倍であった。

〔考察〕

手洗い・うがいをしていない児童のサンプル数が極端に少ないため、慎重に検討する必要がある。しかし、手洗い・うがいをしていない児童が少ないということは、教師の指導が効果を表していることを示している。

手洗いについては、実施しない児童はする児童の5.1倍のリスクがあった。うがいについても、うがいをしない児童は約3.9倍の感染リスクがあった。また、手洗いをする児童とうがいをする児童の相関係数を求めたところ、中程度の相関($r=0.50$)が見られたことから、手洗いをしない児童はうがいもしていないことが示された。したがって実際の感染リスクはさらに高いと考えられる。また、マスク非着用については、約2倍の感染リスクがあった。WHO等、様々な報告において「効果が低い」「感染者がつけることに意味がある」などと示されているが、ごく最近、Lawrence M. Wein (2009)が予防としての効果を報告している。今回の検証でも約2.0倍のリスク比を示しており、少なからず効果があることが明らかになった。

以上のことから、児童・生徒に対して感染予防行動を指導する際には、手洗い・うがい・マスクの3点をセットにして指導することが重要であるといえる。

〔参考文献〕

Lawrence M. Wein 2009 Assessing Infection Control Measures for Pandemic Influenza. To appear in Risk Analysis (with M. P. Atkinson)